

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月30日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530960

研究課題名（和文） 中等教育国語科における朗読を導入したプログラムの開発

研究課題名（英文） Research to create a reading aloud program in secondary education level Japanese language classes

研究代表者

金井 景子（KANAI KEIKO）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：80296392

研究成果の概要（和文）：

本研究は、朗読を用いて中等教育国語科の授業を活性させるためのプログラムとそれを実践し得る教員を養成するためのプログラムの作成を目的とするものである。開発したプログラムは以下の通りである。（1）中等教育国語科の授業を活性させるためのプログラム・・・①近現代の詩歌教育に関するプログラムの開発・実践 ②古典教育に関するプログラムの開発・実践 ③国語科発信の総合学習向けプログラムの開発（2）教員養成のためのプログラム・・・①教職関連科目における朗読指導の学習プログラムの開発・実践 ②教職関連科目における「落語」を使用した学習プログラムの開発

上記のプログラムはすべて、早稲田大学の教職関連科目「中等教育国語科インターンシップ」および「授業技術演習 C」において実施されている。

研究成果の概要（英文）：

This research aims to create a reading aloud program in secondary education level Japanese language classes, and a program for the training of teachers through the practice of this reading aloud program. The program is as follows: (1) Reading aloud program in secondary education level Japanese language classes - 1. Development and implementation of program for education in modern poetry. 2. Development and implementation of program for education in the classics. 3. Development of a general study program for expressive skills in Japanese language classes. (2) Program for the training of teachers - 1. Development and implementation of a teacher training program for instruction of pupils in reading aloud. 2. Development of a training program for the use of rakugo within teacher training. The above program are all carried out in 'Secondary education level Japanese language classes internship' and 'Practice of classroom techniques' courses of the teacher training program of Waseda University.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	600,000	180,000	780,000

2011 年度	500,000	150,000	650,000
総 計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：国語教育・近代文学・地域連携・朗読・教材開発

1. 研究開始当初の背景

本研究は、中等教育（中学校および高等学校）の国語科教員養成において、これまで軽視され勝ちであった音声言語教育の側面を、朗読を軸に据えたプログラムを開発・提案することにより、拡充する一助となることを目的としている。学習指導要領改訂において「教育内容に関する主な改善事項」の筆頭に、「言語活動の充実」が挙げられているにもかかわらず、中等教育の国語科教員養成においては「読むこと」「書くこと」の指導に重点が置かれ、「話すこと・聞くこと」の指導に関しては、個々の受講者の発声から現場での授業実践に至るまでの、体系的で有効性のあるプログラムの提示が、十分になされてきたとは言えない。

求められるのは、実際の現場で即戦力のある教材・教案の提示と、それを実践するスキル向上のための教員養成のプログラムであった。

2. 研究の目的

文部科学省の「平成 18 年度資質の高い教員養成推進プログラム」（のち「専門職大学院等教育推進プログラム」に名称変更）に教科教育の国語で唯一採択された「言葉の力を創生する教員養成プログラム—世界へひらく国語教育のために—」において、私が企画・推進した音声言語教育の講座や現職研修の講演会シリーズの内容を踏まえ、その後に新設あるいは再構築した早稲田大学における国語科の教員養成プログラムを実践の場

としつつ、中等教育国語科教員養成における「話すこと・聞くこと」をめぐる指導の課題を検討し、「届く声」と「聴く力」とを確実に養うプログラムを開発することであった。

3. 研究の方法

小学校教員とは異なり、中等教育の国語科教員はその授業実践に際して「読むこと」を軸に据えた知識注入型の講義を行なうことが基本となっている。本研究では、「話すこと・聞くこと」の授業実践のための教材・教案の提示とともに、その必然性やスキルの習得についても提案する必要性が生じる。また、それらは常に現場の実践と一体になったものでなければ説得性を持ち得ない。

いずれのプログラムの開発に際しても、フィンランドの教育現場（基礎学校、高等学校、職業学校、大学の教員養成機関（教育実習プログラム）への取材に基づき、声を用いた授業実践が作品解釈を触発し合い、互いの歴史認識を深化させる共同性を育てるものとして、学校現場と教員養成機関との連携のうちに育成されることを企図した。

4. 研究成果

（1）高校生向けの教材の開発

①2006 年から一貫して開発している神奈川県立相模原高等学校 1 学年全クラス向けの、竹内浩三の詩と散文を用いた群読の授業（大学生がファシリテートを行う）の方式に根本的な改良を加えた。これまでは各グループごとに発表する形式をとっていたが、一連のシ

ナリオの中に大学生たちの朗読と高校生たちのそれを包摂するスタイルを採用した。この方式で、2011年度から新たに協力校となった三重県立宇治山田高等学校（竹内浩三の出身校）においても群読を用いた授業を行った。これに対しては、2011年が竹内浩三生誕90周年という記念の年でもあり、県立図書館での文学展の開催を期に、地元の新聞メディアから大きな反響があり、宇治山田高等学校OBをはじめとする市民の授業への参加という新たな展開や、三重大学教育学部の学生たちの参加希望（2012年度秋季には金井と一緒に三重大学の学生有志が宇治山田高校で朗読の授業を行なうことになっている）もあり、地域連携の新たな展開があった。

②声を導入した古典教材の開発の成果として、東京都立上水高等学校において2年生を対象にした『平家物語』の授業実践を行った。群読創出に際して、生徒間の話し合いに特色を持たせたプログラムである。高校現場の協力教員が事前に作品の背景や登場人物の心情を生徒たちに把握させた上で、翌年から教員として働くことになっている大学院生たち6名のチームが群読のファシリテートを行い、ともすればこれまでの『平家物語』の群読が陥りがちだった悲壮美の演出に終わらない、登場人物の行動の必然性を問う話し合いや、何が語り伝えられ、何は伝えられていないかなど、声に出すことで自覚化・問題提起できた点は、大きな収穫であった。

③国語科発信の総合学習向けの教材の開発を行なった。具体的には、丸木位里・俊『おきなわ島のこえ』の教材化および教案化と、石牟礼道子『みなまた海のこえ』の教材化および教案化である。いずれも舞台となった沖縄県の読谷村（地域ガイド・よみたん風の会を主宰する比嘉涼子氏に現地コーディネイトおよび指導を依頼）、熊本県水俣市（ほつ

とはうすの教育プログラムの学習と水俣病センター相思社の職員・遠藤邦夫氏現地コーディネイトおよび指導を依頼）のフィールドワークを踏まえ、修学旅行を控えたワークショップを想定して、上記作品の群読の授業を開発した。いずれも、フィールドワークに教員を目指す学生たちが参加し、その成果は、高校生を招聘した、早稲田大学国語教育学会の部会・朗読の理論と実践の会（金井景子が企画・運営している）主催の「朗読実践の提案 IN 早稲田2010および2011」（2010・7と2011・7に実施）で披露した。

（2）大学生向けの教材開発

①教職関連科目「中等教育国語科インターシッパ」において、上記（1）の①②を実践するための教材と教案を開発した。②教職随意科目「授業技術演習C」に提供する、落語の地唄を学び実演することを通して自身の授業パフォーマンスを検証・育成するプログラムを、金原亭馬治氏の協力を得て作成した。この企画に示唆を与えてくれたのは、朗読の世界で長年活躍されている白坂道子氏であった。ことに落語の「枕」に該当する部分は、授業の導入部分と重なり合う役割が多く、また、目前の聴衆のリテラシーを把握してその理解を助けつつも、あたうかぎり無駄を省いて話の主筋に引き込む落語のスキルは、教員の語りの育成・再検討に役立つことが、本件急に賛同して実験台となってくれた現役教員3名と教員を目指す大学生2名によっても検証された。本プログラムは2012年度前期より同授業で実施されている。

（3）現職教員研修のための教材開発

2012年度8月に実施を予定している研修のコンテンツとして、上記の（1）（2）を踏まえた参加型の授業を考案した。

いずれのプログラムの開発に際しても、フィンランドの教育現場（基礎学校、高等学校、

職業学校、大学の教員養成機関（教育実習プログラム）への取材に基づき、声を用いた授業実践が作品解釈を触発し合い、互いの歴史認識を深化させる共同性を育てるものとして、学校現場と教員養成機関との連携のうちに育成されることを企図した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

①金井景子、フィンランド、声がつなぐ言語教育一成長を支える共同性のかたち（1）、早稲田教育評論、査読有、24巻1号、2010、221-230

②金井景子、フィンランド、声がつなぐ言語教育一成長を支える共同性のかたち（2）、早稲田教育評論、査読有、26巻1号、2012、211-222

③金井景子、正岡子規と女性、国文学 解釈と鑑賞、査読無、2010、75巻11号

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金井景子（カナイ ケイコ）

研究者番号：

80296392

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

なし

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：

なし